

原著

基礎看護学実習において看護学生が患者像を描く過程の特徴

伊尾喜恵, 津田智子, 山岸仁美

【要旨】

本研究の目的は、基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにし実習指導上の示唆を得ることである。研究対象者は4年制大学2年次の基礎看護学実習において筆者が直接指導を行った学生で、本研究への同意が得られた学生3名を分析対象とした。研究方法は、学生の実習等の記録、筆者の実習メモ、学生へのインタビュー内容から学生が描く患者像が作りかわる契機に着目して局面とし、学生の看護過程を再構成した。局面ごとの学生の認識に着目し、学生がどのように患者像を描いたのか、その特徴と患者像を抽出した。次に、局面間のつながりを押さえながら、各学生が患者像を描く過程の特徴を抽出した。各学生の患者像を描く過程の特徴について共通性と相異性を検討した。その結果、基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴として、以下の3点が明らかとなった。

- ①学生は患者像を描けていないと自覚することで患者への関心が高まり、捉えた事実を学生が持つイメージや追体験、関わりの客観視をもとに患者にとっての意味を考えながら患者像を描こうとする。
- ②学生はまず、からだの変化に関心を注ぎ、日常生活にどのような変化が生じているか、その事実を捉え、患者の反応からその状況にある患者の思いを描こうと関心を注ぐ。捉えた事実の患者にとっての意味を描こうと取り組むことで、からだどころと社会関係のつながりが描け、さらに、その変化のプロセスを捉えようとする。
- ③学生は目の前の患者に備わっている持てる力を見出そうと取り組むことで患者の願いに気づき、その願いの実現を妨げているものとは考え、解決すべき対立が見え、患者の目標像が描ける。

以上から基礎看護学実習において教員は、学生がどの事実に着目して患者の立場から意味を考えどのような患者像を描いているかを読みとり、患者の持てる力に関心を注ぎながら患者像を描いていけるように関わる必要がある。

【キーワード】 基礎看護学実習, 看護学生, 患者像, 看護過程

I. 序論

1. はじめに

臨地実習は、学生がこれまでの学習を活かしながら実際の患者への看護を通して、看護実践能力を修得していく看護基礎教育課程において不可欠な学習である。実習において、学生はまず患者像を描き、患者の健康状態が好転するために必要な看護を見出して看護を行っていく。学生が看護実践能力を修得

するためには、患者像を描く力を身に付けていくことは重要なことである。

筆者は4年制大学の2年次生の基礎看護学実習の指導に携わっている。基礎看護学実習において学生は、慣れない環境や初めての患者との関わりや記録などに戸惑いや困難感を抱きながら¹⁻³⁾、初めて実際の患者への看護実践に取り組む。目時ら⁴⁾は、基礎看護学実習で学生は患者と話しながら意識的に情報収集

することや、情報収集はできても情報のつながりが分からないなどの患者理解に関する困難感があったと報告している。また、基礎看護学実習において患者像を描くという観点では、患者像を描くために学生が得た患者情報の特徴⁵⁾や、学生がどのように患者を捉えたか患者理解に関する特徴^{6) 7)}も報告されているが、学生がどのように患者像を描いていたのか、その思考過程を明らかにした研究は少ない。

筆者は、実習指導において学生の記録や発言から学生がどのように患者像を描いているのかを推察しながら関わり、学生によって個人差はあるものの、実習が進むにつれて学生の患者像が変化していくと実感している。田村⁸⁾は、学生の看護者としての認識の発展過程の構造の中で、学生の患者像の広がりについて明らかにしていた。その構造は、学生は「捉えた現象を、それまでの生活体験・学習、患者に関する事実から意味づけながら患者像を描き、それとは異なる患者の反応や他者の捉え方から患者像をつくりかえる。このつくりかえを繰り返しながら、(中略)実像に即した患者像を描けるようになっていく」というものであった。学生は患者と関わり、患者の日常生活の様子を観察したり話を聞くことで患者の様々な反応を捉えることができ、その意味を考えることで患者像は変化していく。しかし筆者は、学生が患者との関わりを通して様々な患者の反応を捉えたとしても患者像を描けていないと感じることや、反対にわずかな反応しか得ていないのに学生の患者像が広がったと感じることがあり、学生はどのように患者像を描くのかと問いが湧くようになった。

基礎看護学実習で学生は初めて実際の患者に出会うが、そこには無限の事実が存在している。その中から看護をするために必要な事実を選び、患者像を描いていく過程には、既習の知識が呼び起こされるきっかけや患者に対する学生の感情の変化など、様々なことが複雑に絡み合いながら変化していくのではないだろうか。患者像を描くのは学生自身であり、学生が患者像を描く過程は目に見えない認識活動であるため、その過程にどのような気付きや意識の変

化があったのかは、学生に意識的に問うことなしには捉えることは困難である。これまでの研究で、学生が患者像を描いていく過程に焦点をあて、その特徴を明らかにした研究を見出すことはできなかった。

そこで、学生が初めて実際の患者に看護を行う基礎看護学実習で、学生がどのように患者像を描いていたのか、学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにすることで、臨地実習における指導上の示唆を得ることができるのではないかと考えた。

2. 研究目的

1) 研究目的

本研究の目的は、基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにすることである。学生が患者像を描く過程を明らかにすることで、基礎看護学実習における指導上の示唆を得る。

2) 理論的前提および用語の定義

(1) 理論的枠組み

本研究は、基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにすることを目的とする。よって、対象となる学生が学んでいる薄井の科学的看護論⁹⁾を理論的基盤とした。

(2) 用語の定義

看護：生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえること¹⁰⁾

患者像：看護者が看護するための目的意識を持って、看護の対象である患者を見つめて描いた像

患者像を描く過程：看護者が患者の客観的な事実を反映し、過去の体験や学習によってたくわえられた記憶や専門知識を呼び起こし、それらの間に合理的なつながりを見出して患者像を形成する過程

II. 研究方法

1. 研究対象

研究対象者：平成28年度に基礎看護学実習の実習指導者として直接指導を行った学生のうち、本研究への協力が得られた学生

研究対象：研究対象者の基礎看護学実習とその振り

返り授業の記録，実習において学生が患者像を描く過程についてのインタビュー内容，筆者の実習指導中のメモをデータとする。以下に，本学における基礎看護学実習とその振り返り授業の授業目的，開講時期，概要を述べる。

〔基礎看護学実習〕

目的：対象である人間の健康状態の好転をめざして，その人の生活過程をととのえるための看護実践能力を修得する。

時期：2年次後期

概要：初めて1人の患者を受け持ち，看護過程を展開する。学生は事前に患者情報を受けとり，翌週月曜日から金曜日までの5日間実習を行う。

〔振り返り授業〕

目的：基礎看護学実習の看護体験を振り返り，看護する能力の到達度を自己評価し，学習課題を定める。

時期：3年次前期（4月～6月中旬）

概要：基礎看護学実習での自己の看護実践を看護過程に沿って再構成し，看護過程の客観視を行う。自己の看護過程から看護の評価を行い，さらに専門職者としての看護実践能力の自己評価を行い学習課題を定める。

なお，筆者は基礎看護学実習で担当した学生へ一連の授業で関わる。

2. 研究方法

1) データ収集方法

データ収集期間：平成29年7月～平成29年9月

学生の基礎看護学実習と振り返り授業の記録と筆者の実習指導中のメモをもとに，学生の看護過程を事前に患者情報を得た時点と5日間の実習経過に沿って，〈学生が着目した患者の状況〉〈学生が感じ考えたこと〉〈学生の関わり〉からなるフォーマットに再構成し研究資料を作成する。研究資料を用いて，学生がその時々捉えていた患者の事実や思いなど，より詳しい内容について学生に半構成的インタビューを行う。インタビューは学生の許可を得て，ICレコーダーに録音するかメモを取りながら記録する。

2) 研究素材の作成

インタビュー内容を逐語録に起こし，患者像を描く過程についての語りや，捉えていた患者の状況や学生の関わりについての語りを研究資料に追加し，学生が描いた患者像が作りかわる契機に着目して局面とし，研究素材を作成した。

3) 分析方法

(1) 局面ごとの学生の認識に着目しながら，学生は①どのような事実に着目したのか，②どのようなことを想起したり感じ考えたりしたのか，という観点から各局面において学生が患者像を描く過程と患者像を抽出する。

(2) 局面間のつながりと学生の看護過程を重ねながら，各学生が基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴を抽出する。

(3) 各学生が基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴から共通する特徴を抽出する。

なお，研究素材の作成および分析過程においては，本研究方法に習熟した看護学研究者のスーパービジョンを受け，研究結果の信頼性・妥当性を高めた。

4) 倫理的配慮

本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会（平成29年度第11号）と実習施設の倫理委員会の承認を得て行った。

学生へは本研究への協力は自由意思であり，対象者の匿名性およびプライバシーの保護，成績や学業への影響は一切ないことを，実習および振り返り授業の成績評価後に文書および口頭で説明して同意を得た。学生と学生の受け持ち患者および家族の個人情報には匿名化・一般化し，研究に必要な最低限の情報のみ使用した。

III. 結果

1. 研究素材の作成

研究への協力が得られた学生3名を分析対象とし，学生A～Cの受け持ち患者の事例と看護実践の概要を表1に示した。

次に，学生A～Cの実習等の記録およびインタビュー内容をもとに，実習経過に沿って学生の看護過

表1 受け持ち患者と看護実践の概要 注：（ ）は分析過程において局面となった看護実践を示す。

	受け持ち患者	看護実践
学生A	<p>D氏 80歳代 男性 160cm 50kg 髄膜炎 褥瘡治癒後 糖尿病</p> <p>約3週間前に発症、JCS100～300、項部硬直あり緊急入院。2日後、X病院へ転院、意識障害や項部硬直残存。転院2日後より全身状態改善。現在、意識清明、日常生活全介助、リハビリ介入中。既往は25年前胃がん、15年前胆嚢炎、10年前脊柱管狭窄症、5年前に白内障。糖尿病は経過不明、現在はインスリンと内服にて治療中。元々杖歩行。家族は妻と二人暮らし、自宅は遠方。転院約3週間後より受け持ち開始。</p>	<p>学生は事前情報から患者のからだや健康の段階を描き、こころや生活過程など描けていないと自覚し(局面1)、意識的に情報収集しようと思った。学生は患者の発言から患者の思いを想像し(局面2)、患者は悪いところを気にしているが、回復する力があると描いた(局面3)。食事や排泄の日常生活の問題点を早期に捉え(局面4)、患者自身が達成感を感じられるようにと患者自身で健側を使うように関わった(局面5)。また家族面会時に、家族の思いや生活を想像し、家族の力を患者も実感できるように関わった(局面6)。実習中盤、リハビリの段階に着目しながら関わると、食行動や患者の食事への思いの変化を捉え(局面7)、必要なケアを検討した。また、思いがけない患者の反応があったが患者が回復を実感できる好機と捉え(局面8)、患者自身が回復を実感できるようにこれまでの経過を説明した。そして、学生は検査結果から、からだの回復を描き日常生活動作の再獲得には時間を要すると捉えた(局面9)。実習終盤、患者が便意を訴え、前日までのリハビリ状況からトイレでの排泄を援助し、患者が望む形で排泄することは満足感につながると考えた。さらに、足浴後に排尿があり快の刺激により排尿が促されたかと考えた(局面10)。排泄時の姿勢保持や移動動作も安定してきており、患者自身も変化に喜びを感じていると捉え(局面11)、患者らしい入浴にするための清潔行動の拡大につながった。</p>
学生B	<p>E氏 60歳代 女性 150cm 40kg 左脳出血 レビー小体型認知症 (要介護5、施設入所中)</p> <p>約3週間前発症。入院時、JCS100、保存療法。現在、JCS10、入院前より意思疎通不可。体温37℃前後で推移、循環動態、呼吸状態は安定。経管栄養、排泄はオムツ。リハビリ介入中。右麻痺あり、左手にミトン装着中。家族は長男の嫁が短時間だがほぼ毎日面会あり。入院約3週間後より受け持ち開始。</p>	<p>学生は事前情報では患者のイメージが湧かなかった(局面1)。患者との関わりを通し、意思疎通が困難で他者からの援助が必要な患者と捉え、過去の体験実習を想起し、患者の思いに関心が湧き、患者の反応や振り返りから思いを推察した(局面2)。検温により全身状態を描き、さらにミトンに自分の手を入れる事で患者の不快感や運動制限を描いた(局面3)。面会時の患者の反応から、ベッド上で過ごす患者にとっての家族の意味を考えた(局面4)。実習中盤、発熱時にミトンを外した際の健側の動きは失禁の訴えではと推察し、患者は言葉以外の意思表示できる力があるのではと考えた(局面5)。手浴や入浴介助を行うと、皮膚の清潔、浮腫の軽減、休息の促進の効果を実感し、カンファレンスを通して麻痺がある患者への求心性の刺激の必要性を描いた(局面6)。リハビリ時の患者の様子とOTの発言から、患者の経口摂取の可能性を探り、経口摂取ができれば抑制が解除でき、患者の意思表示につながり、さらに患者の自律性の向上に繋がるのではないかと患者の目標像を描いた(局面7)。最終日、吸引後も苦痛様表情が続く患者の失禁を予測し直ちにケアを実施したが、ただでさえストレスが多い患者にこれ以上のストレスを与えてはいけないと考え(局面8)、排泄パターンから失禁を予測して関わった。</p>
学生C	<p>F氏 70歳代 男性 160cm 60kg 右脳出血 左上下肢不随意運動</p> <p>約1か月前、異常行動等あり、2日後に近医受診、右重急性脳梗塞と診断。翌日、X病院紹介受診。10日間、自宅で生活していたが、家族では対応困難となり、約20日前緊急入院。入院後、保存療法とリハビリ開始。徐々に不随意運動は減少傾向。現在、JCS2、MMT右上下肢4 左上下肢3、ベッド柵にカバー使用中。家族は妻と娘、健康状態が悪く面会は難しい。元運送業。入院約3週間後より受け持ち開始。</p>	<p>学生は事前情報から患者の症状の程度を想像しようとしたが、学習内容と患者の事実が繋がらなかった(局面1)。患者との関わり、患者の感情の変化や他者への関わり様子から、患者の個別な反応や日常生活力を捉え(局面2)、患者の発言から患者は障害に不便さを感じながらも回復していると感じていることを知った(局面3)。不随意運動や環境に配慮して食事介助の方法を検討すると患者自身で食事ができた(局面4)。リハビリは進んでいたがトイレでの排泄は難しく失禁を繰り返す患者に対し、トイレでの排泄のためには段階を踏むことが必要と考えた(局面5)。実習中盤、カンファレンスをきっかけに改めて自分が得た事実を見つめ直し、失禁を繰り返す患者の思いと家族にとっての負担を描いた(局面6)。さらに、抑制と失禁に対し患者が激しく感情を乱し、患者にとってトイレでの排泄は唯一の願いであるが目標を再認識してほしいと考え(局面7)、PTの協力を得てトイレで排泄できた。また、患者は感情を乱しながらも患側を気にしており手浴を行うと、実習初期から気掛かりであった肥厚した皮膚色の変化、多量の垢、不随意運動の消失といったケアの効果を実感し、患者は嬉しそうに自分の手を眺めた(局面8)。最終日、失禁後のケア時に患者が涙を浮かべ、患者の複雑な思いを感じ取り、患者の思いを尊重しつつ患者自身でできることが増えるように関わることが必要と考えた(局面9)。午後、足浴を行うと患者の不随意運動は消失、表情も穏やかになった。</p>

表2 研究素材の1例：学生B（局面2）

学生が着目した患者の状況	学生が感じ考えたこと	学生の関わり
<p>全身清拭と陰部洗浄 挨拶に行くと、うっすら目を開けたり閉じたりを繰り返す。目線があわず、返事がない。</p>	<p>コミュニケーションが取れない方なんだ。 要介護5って、結構重いんだな。</p>	<p>一旦退室する。 しばらくして、教員と全身清拭と陰部洗浄を行う。</p>
<p>ギャッジを下げると、「うー」と発声した。</p>	<p>怖いのかな。</p>	<p>弾性ストッキングを外すのに時間がかかった。</p>
<p>弾性ストッキングを外すと大きく目を開けた。</p>	<p>下肢の解放感が気持ちよかったのか、刺激に驚いたのだろうか。こういう反応がある人なんだ。弾性ストッキングの着脱はEさんにとって日常的に行われているケア、不快感を与えず身体の消耗を最小にすることが大切。</p>	<p>健側の上半身を清拭する。「気持ちいいですか」と声をかける。</p>
<p>反応はなかった。健側には栄養チューブ誤抜去防止のためにミトンをつけられていたが、清拭の際にタオルを強く握った。</p>	<p>健側の手指の筋力や脳からの信号は衰えていない。何かを訴えている様子だが、わからない。体が反射的に反応しているのではなく、意思とまではいかないけど、刺激に対する反応かな。</p>	<p>声をかけながら陰部洗浄を行った。オムツがずれないように、そしてパジャマのしわがないよう伸ばした。両下肢にクリームを塗って保湿した。新しいズボンに替え、弾性ストッキングをはめた。</p>
<p>表情の変化があるのかなと思ったが、Eさんの反応として目立った様子は見られなかった。</p>	<p>1年生の体験実習で神経難病の患者さんが「今までできていたことができなくなって、人にしてもらうのところが悔しい」と話していたことが印象に残っている。とにかくEさんの気持ちを大事にしたい。</p>	
<p>午後の関わり 訪室するとタオルが左手あたりで乱れていた。</p>	<p>勝手が悪そうだ。</p>	<p>タオルをかけ直し、「どうですか」と聞く。</p>
<p>「うー」と唸るような声。</p>	<p>うんとうなずかれているのだろうと思ったが、はっきりとはわからない。自分が寝たきりで、同じようにタオルが乱れていたら、すごく気になるかな。麻痺側は動かないからタオルをかけ直してほしかったのではないかな。</p>	
<p>オムツ交換時にベッドのギャッジを戻し平らな状態から高さを下げた際に「あーあー」と声を出したり、膝を立てるときに眉間にしわを寄せた。</p>	<p>何だろう。なんで下げるだけで嫌なのかな。Eさんは細いから尾てい骨が痛い？でもベッドだから痛くないか。不快を訴えているようだが、どこがどう不快なのかわからない。</p>	
	<p>声かけが少ないことや膝立てのスピードが怖いことなどは。Eさんは自分の意思をその場で言えないから、ずっと受け身でされるがままっていうか。だからケアが早ければ早いほど、体位変換も1回1回患者さんに声かけをするけど、確認を取りながらじゃなくって、一方的な感じになるかな、怖いんじゃないかな。</p>	<p>関わり後、メモをとる。</p>

程を再構成した。学生が描く患者像が変化した契機に着目して局面とすると、学生Aは11、学生Bは8、学生Cは9局面が抽出された。研究素材の一例として、学生Bの局面2を表2に示した。

2. 分析過程

各学生が基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴を抽出するまでの分析過程を、学生Bを例に述べる。

1) 実習の概要

学生Bの実習の概要は以下の通りであった。

〈受け持ち患者〉

E氏 60歳代 女性 150cm 40kg 左脳出血
レビー小体型認知症

約3年前から認知症症状が出現、2年半前より施設入所中であり、現在、要介護5。

3週間前に脳出血を発症し、救急搬送された。入院時JCS100、保存療法にて現在JCS10、瞳孔所見異常なし。入院前より意思疎通は不可。体温37℃前後で推移し、循環動態、呼吸状態は安定していた。食事は経管栄養、排泄はオムツにて全介助。ベッドサイドリハビリ中。右上下肢麻痺あり、左手にミトン装着中。家族は長男家族が同市内在住、長男の嫁の面会がほぼ毎日あった。入院約3週間後より受け持ち開始となった。

〈学生の看護実践〉（ ）は分析過程において局面となった看護実践を示す。

実習前、学生は受け持ち患者の年代や体格、入院日、診断名、治療処置、薬剤、必要な看護技術についてや、経管栄養中、リハビリ中、要介護5で施設入所中という事前情報を得たが、患者のイメージが湧かないと感じた(局面1)。実習初日、学生は患者に挨拶すると視線が合わず発語がないことからコミュニケーションが困難で、要介護5を重いと感じた。清拭などのケアを通し、反応の乏しい患者のわずかな反応や上肢の動きに着目し、意思疎通が困難で他者からの援助が必要な患者と描いた。そして、過去の体験実習を想起し、患者の思いを大切にしたい気持ちが湧き、患者のわず

かな反応を見つめ、看護過程を思い返しながら患者の思いを想像した(局面2)。実習2日目、検温を行い患者の循環と体温の状態を描いた。午後、患者の体温が上昇し、看護師の助言を受け、体熱感への対処としてミトンを外した。そして、患者のミトンが気になり自分の手を入れ、ミトン内部の熱感に驚き、患者の手指の運動の制限を想像した(局面3)。また、面会時の初めて見る患者の表情から、ベッド上で過ごす患者にとっての家族の意味を考えた(局面4)。実習中盤、学生が発熱による患者の体熱感に対しミトンを外すと、患者が左手で腰あたりのリネンを掴んだ。その様子が気になりながらも、患者の失禁に気付いて教員とオムツ交換を行った。その後振り返ると、オムツ交換前の患者の左手の動きは失禁を訴えていたのではと考え、患者は言葉以外の方法で意思表示できる力があるのではと推測した(局面5)。3日目に手浴を行うと多量の垢が出て、発熱を繰り返す患者の皮膚の汚れに驚き、浮腫への効果も実感した。4日目の入浴介助では、患者は手浴時よりも心地よさそうな表情を見せ、学生は手のマッサージを行いながら垢を落とした。入浴後に患者は入眠し、学生は患者の副交感神経が優位になったと考えた。さらに、学生はカンファレンスを通して、入浴は快の刺激のみならず、麻痺がある患者への求心性の刺激となり、そのような刺激が必要と看護の方向性を再確認した(局面6)。4日目のリハビリ時、学生が患者の流涎をめぐうと患者は閉口し流涎しなくなった。作業療法士が食形態によっては経口摂取できるのではと話し、学生は患者が誤嚥しない工夫ができれば経口摂取できるようになるのではと考えた。さらに、経口摂取が可能になれば栄養チューブとミトンが不要となり、ミトンが解除できれば患者のストレスの軽減や手の清潔保持のみならず、発語ができない患者の持てる力が発揮でき周りが患者の意思に気付きやすくなり、他者に日常生活を委ねざるを得ない患者の自律性が高まるのではと患者の目標像を描いた(局

面7)。実習最終日、学生は検温前に患者の異常呼吸に気付く、直ちに看護師に吸引を依頼した。しかし、吸引後も患者の表情が変わらず、失禁かと予測し布団を確認すると多量の失禁に気付いた。教員とケアを行いながら、もっと早く気付けなかったかと思い、様々な制限によりストレスが多い患者にこれ以上のストレスを与えてはならないと考えた(局面8)。午後には、これまでの排尿パターンなどを踏まえ、検温前にまずは排泄を確認しようとオムツを確認すると失禁しており、教員とオムツ交換を行った。

2) 各学生が患者像を描く過程の抽出

次に、実習初日の局面2を例にして、学生の認識に着目し、学生が①どのような事実に着目したのか、②どのようなことを想起したり感じ考えたりしたのか、という観点から、局面において学生が患者像を描く過程と描いた患者像について述べる。なお、局面における事実は斜字で示す。

学生Bは、初めて患者に挨拶すると患者は声かけに対しうっすら目を開けたり閉じたりを繰り返し、目線が合わず返事もない様子から、コミュニケーションが取れない方、要介護5って結構重いと感じていることから、自立度が低く他者からの援助が必要な患者と、事前に描けなかった患者の状態を描こうとしていたといえる。

その後、学生は教員と全身清拭と陰部洗浄を行う場面で、教員が患者の弾性ストッキングを脱がせると患者が大きく目を開け、解放感が驚いたのか、こういう反応がある人と考えながら、上肢を清拭した。さらに、ミトンを外すと患者が健側でタオルを強く掴み、学生はミトンの意味を考えながら、健側の手指の筋力や脳からの信号は衰えておらず、何か訴えているのかわからないが、刺激に対する反応かなと考えた。このことから、学生はケアを行いながら、患者は刺激に対する反応を示しており、残存機能があると捉え、患者のわずかな反応の事実を捉え、患者にとっての意味を考えようとしていたといえる。

そして学生は、1年次の体験実習で神経難病の患

者が今までできていたことができなくなって人にしてもらうことが悔しいと語った関わりを想起したことで、意思表示が困難な患者の気持ちを大切にしたいという強い思いが湧き上がっていたといえる。

午後、学生は患者の左上肢あたりのタオルの乱れが気になり、整えると患者がうーと唸るような声を出し、はっきりとはわからないが、もし自分が寝たきりで同じようにタオルが乱れていたら気になるだろうと考えた。オムツ交換時には、ベッドの高さを下げると患者があーと発声したり、膝を立てた時に眉間にしわを寄せたことが気になり、自らこの場面を振り返った。声かけしながらケアを行うが、患者は自分の意思が言えず一方的に感じ怖かったのではないかと考えた。このことから、学生は患者のわずかな動きや表情の変化に着目し、関わり後には、患者の反応とその時の関わりも併せて自ら振り返り考え、患者にとっての関わりの意味や患者の気持ちを描こうとしていたといえる。

つまり、局面2において学生Bが患者像を描く過程には、まず、発語がない様子やケア時の反応など、患者と直接関わることで得られた<着目した事実>があった。そして、着目した事実から、刺激に対する反応を示している、健側の機能は衰えていないと患者にとっての意味を考えたり、過去の実習を想起するといった<想起した知識や体験に基づく判断>があった。さらに、患者の気持ちを大切にしたいといった<学生の感情・意志>の変化があった。

以上より、局面2において学生Bは〔意思表示が困難で日常生活のほぼすべてに他者からの援助が必要だが、刺激に対し快・不快の反応を示し、健側は衰えていない〕という患者像を描いたと抽出した。

同様に、全ての局面ごとに学生はどのように患者像を描いていったのか、その過程を抽出し、<着目した事実><想起した知識や体験に基づく判断><学生の感情・意志>に類別して、キーワード・キーセンテンスを選択して、図1に示した。

全8局面において、学生Bはどのように患者像を描いたのか、その過程の全貌について述べる。なお、

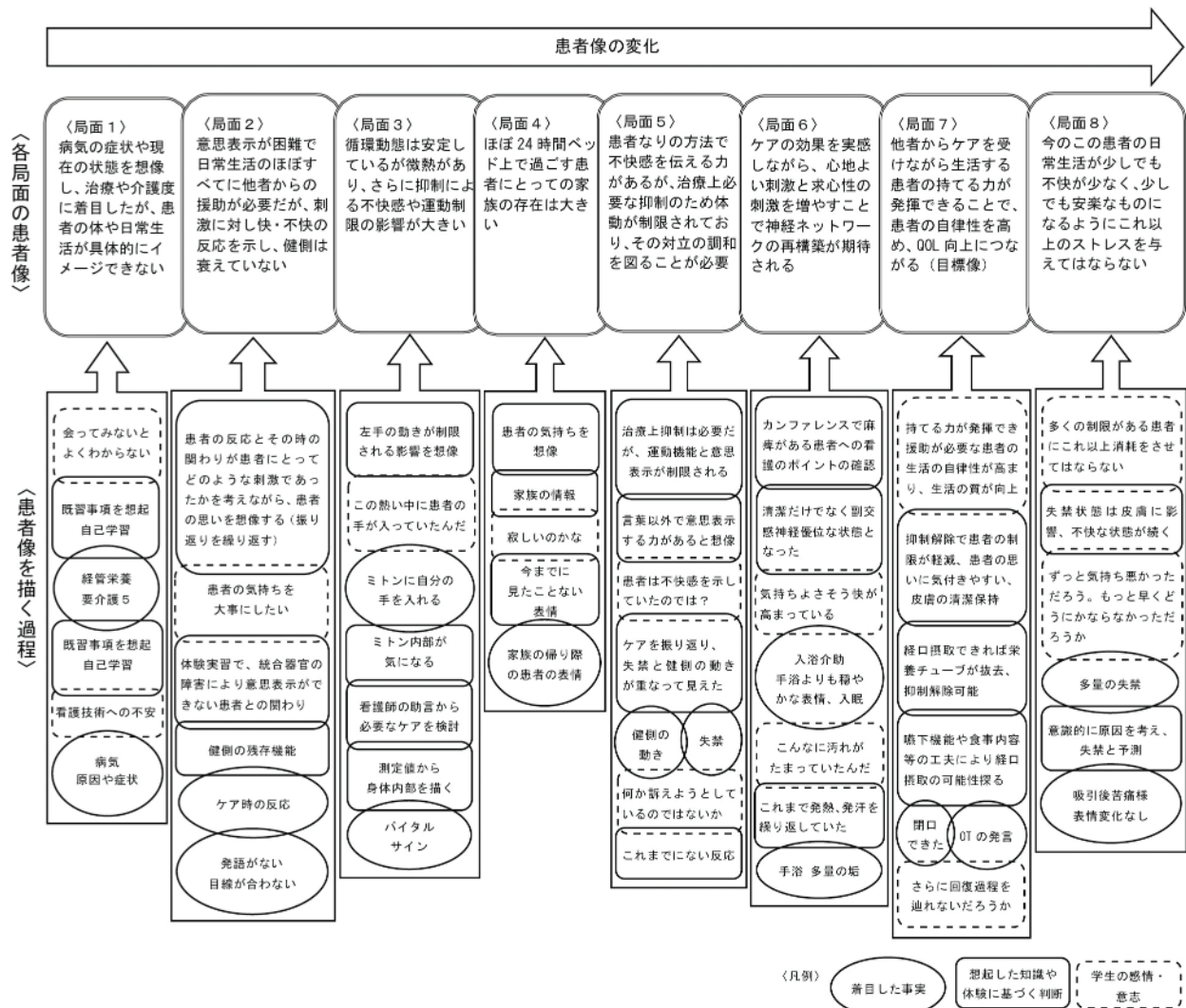


図1 学生Bが患者像を描く過程

各局面で学生Bが描いた患者像を〔 〕に示す。学生は、実習前に患者情報を受けとり、患者の年代や体格、病名、入院日、治療処置、薬剤、必要な看護技術などの情報から、病気の症状や現在の状態を想像したが、患者の体や日常生活が具体的にイメージできず、この時点では「病気の症状や現在の状態を想像し、治療や介護度に着目したが、患者の体や日常生活が具体的にイメージできない」と、まだ患者像が不明確と自覚した(局面1)。

実習初日、学生は挨拶時の反応から、コミュニケーションが取れない、要介護5は結構重いと捉えて

いた。その後、学生はケア時の患者の反応に着目し刺激に対する反応があり、残存機能があると描いた。さらに、学生は1年次の体験実習を想起し、患者の気持ちを大切にしたいという強い思いが湧き上がり、患者のわずかな反応や関わりからの振り返りから患者の思いを想像し、〔意思表示が困難で日常生活のほぼすべてに他者からの援助が必要だが、刺激に対し快・不快の反応を示し、健側は衰えていない〕という患者像を描いた(局面2)。

実習2日目、学生は検温を行い、患者は循環動態は安定しているが微熱があり、看護師の助言を受け

てケアを検討し、熱を放散させようとミトンを外した。学生はミトン内部が気になり自分の手を入れてみると、その暑さの中に患者の手が入っていたことに驚き、さらにミトンにより患者は動かせる左上肢の動きが制限され、患者のストレスや運動機能の衰えを危惧していた。この局面では〔循環動態は安定しているが微熱があり、さらに抑制による不快感や運動制限の影響が大きい〕という患者像を描いた（局面3）。

実習2日目、学生は家族が帰宅する際の患者の悲しそうな表情から、今までにはない患者の表情だと思った。患者の寂しさを想像しつつ、毎日面会に来ている家族の支える力を描き、〔ほぼ24時間ベッド上で過ごす患者にとっての家族の存在は大きい〕と患者像が患者の社会関係にまで拡大した（局面4）。

実習3日目、学生が患者の体位調整時に患者が学生を見て口を動かす反応を見て、何か訴えているのだろうかと考えた。午後、学生は患者の発熱・発汗に対しミトンを外すと、患者が腰のあたりのバスタオルを強く握り、学生は気になったが、失禁に気付いて教員とオムツ交換をした。その後振り返ると患者がバスタオルを握った動きは失禁による不快感を訴えていたのではないかと考え、言葉以外で自分の意思を伝えようとする持てる力があると捉えた。さらに、患者には治療上ミトンは必要だが、一方では患者の運動機能と意思表示の妨げになると考え、〔患者なりの方法で不快感を伝える力があるが、治療上必要な抑制のため体動が制限されており、その対立の調和を図ることが必要〕と患者に生じている対立を描いた（局面5）。

実習3日目、学生が手浴を行うと多量の垢が出て、これまで発熱を繰り返し予想以上の汚れが溜まっていたと患者の皮膚の状態を描いた。実習4日目のストレッチャー浴介助では、入浴中に患者が手浴よりも穏やかな表情を見せ、さらに入浴後には入眠したことで、清潔のみならず副交感神経が優位になったとケアの効果を実感した。さらに、カンファレンスで統合器官の障害で麻痺が生じている患者への看護のポイントをメンバーと再確認し、〔ケアの効果を

実感しながら、心地よい刺激と求心性の刺激を増やすことで神経ネットワークの再構築が期待される〕と必要な看護の方向性を描いた（局面6）。

学生は、患者の持てる力が見え、患者がさらに回復過程を迎えないかと考え始めていた。実習4日目のリハビリ時、患者が閉口し流延が止まり、作業療法士の食形態による経口摂取ができないかとの発言があり、学生は患者が時々唾液を嚥下する様子を思い出し、誤嚥しないような食事内容や体位の工夫などによる経口摂取の可能性を考えた。さらに、経口摂取が可能になれば患者は栄養チューブと抑制が不要となり、患者の制限が軽減され、患者は意思表示ができることで周りが患者の思いに気付きやすくなり、患者の手の清潔も保てると考え、患者の持てる力を生かすと同時に患者の自律性を保つことができ、QOLの向上につながるのではと考えた。学生は〔他者からケアを受けながら生活する患者の持てる力が発揮できることで、患者の自律性を高め、患者のQOL向上につながる〕という患者の目標像を描いた（局面7）。

最終日の朝、学生が検温のため訪室すると患者の呼吸の異常に気付き、即座に看護師に吸引を依頼したが、吸引後も患者の苦痛様表情が変化しなかった。学生は、これまでの患者の反応から失禁と予測し、確認するとシーツにまで失禁が広がっており、すぐに教員とケアを行いながら、吸引中もずっと患者は不快だっただろうと患者の思いを想像しながら、もっと早く対応できなかったかという思いが湧いていた。学生は、オムツ交換により患者の不快感を取り除くことはできたが、失禁による皮膚への炎症や感染の原因となり、さらに不快感の原因になると考え、ミトンなどの制限が多い患者に対し、これ以上決して消耗させてはならないと考え、〔今のこの患者の日常生活が少しでも不快が少なく、少しでも安楽なものになるようにこれ以上のストレスを与えてはならない〕患者と描いた（局面8）。

全ての局面のつながりと学生の看護過程を重ねながら学生Bが基礎看護学実習において患者像を描く

過程の特徴を【事前情報では具体的な患者の状況がイメージできず、直接関わって確認しようと考えた。患者の反応から、患者は意思表示が困難で他者からの援助を要すると捉え、過去の神経難病患者との関わりを想起し、患者の思いへの関心が高まり、患者の反応や関わりから振り返りを重ねながら患者の反応の意味を問うた。さらに、追体験や面会時の反応から患者の思いを描いた。患者の意思表示が可能という持てる力を捉え、患者が持てる力を発揮でき、QOLの向上につながるという目標像を描き、そのため今の生活を整え、これ以上消耗させてはならないと描いた】と抽出した。

同様に、学生A・学生Cが患者像を描く過程を抽出し、図2、図3に示した。

学生Aが基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴として、【初めて聞く疾患名に対し病気を知らなければならぬと目標が定まり、既習内容を思い起こしながら自己学習をし、病気の特徴、現在の健康の段階を描いた。一方で、患者の思いや日常生活等は不明確と自覚した。突然障害を負った患者の思いを想像しながら、自己学習の視点も自己評価した。患者は自己の運動機能の回復が気がかりであるが、患者の回復した部分に着目し持てる力と描いた。患者自身で回復する力に気付くことが必要な段階と捉えた。患者の日常生活行動の良き変化に着目し、患者が喜びを感じるようになったと変化を捉え、さらに患者の満足感が高まるよう日常生活行動の拡大が可能な段階】と抽出した。

学生Cが基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴として、【病気や症状に着目するが情報が繋がらず断片的だった。患者との関わりを通して、人と関わる力や日常生活の事実を捉え、患者は患側の動きをもどかしく感じる反面、回復を少しずつ実感していると捉えた。患者の排泄の自立を強く願う思いを感じ取りつつ、カンファレンスを通して自分自身が患者像を描けていないことを自覚した。これまで得た情報を見つめ直したり、自己の関わりを振り返ることで情報がつながりはじめ、患者の唯一の

願いを叶えることは家族への負担軽減になることと考えた。さらに、患者の理想と現在の運動機能とにずれが生じており、他者の援助を受ける複雑な思いを感じ取り、その思いを尊重しながら回復過程を迎えられるようにと目標を定めた】と抽出した。

3) 基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴

次に、3名の学生の患者像を描く過程の特徴から共通性について検討した。

(1) 患者の事実に着目し、その意味を考える過程について

学生Aは実習前に患者情報を得て、初めて聞いた病名に戸惑いながらも、まずは病気について知ろうと目標を定め、既習内容を想起しながら自己学習を行い、病気の特徴や治療内容を捉えながら患者を描こうとしていた。点滴の終了や留置カテーテル抜去の事実から、想像していた以上に回復しているのではないかと健康の段階を予想していた。さらに、患者の日常生活援助に関して、食事や排泄などは全くイメージできなかった。また、からだのことはわかったと自覚する一方で、こころの部分は全然わからない、どう考えているのだろうと問いが湧いていた。学生Bは、実習前に得た情報に対し疾患や薬剤、行われている処置や介護度について事前学習を行ったが、ベッド上にいる患者の姿が想像できず、直接会って確かめようとしていた。学生Cは、実習初日から2日目までに食事や排泄の介助、家族について情報収集していた。しかし、実習3日目のカンファレンスで他の学生や教員の意見を受けて、自分は患者のことを描けていないと自覚し、これまでに把握した情報を再度見つめ直し、事実のつながりや患者と家族にとっての意味を考えていた。

以上のことから、全ての学生が患者像を十分に描けていないと自覚することで、新たに情報収集したり、すでに把握している事実を見つめ直したり、患者の事実を意識的に捉えようと取り組んでいたことがわかる。

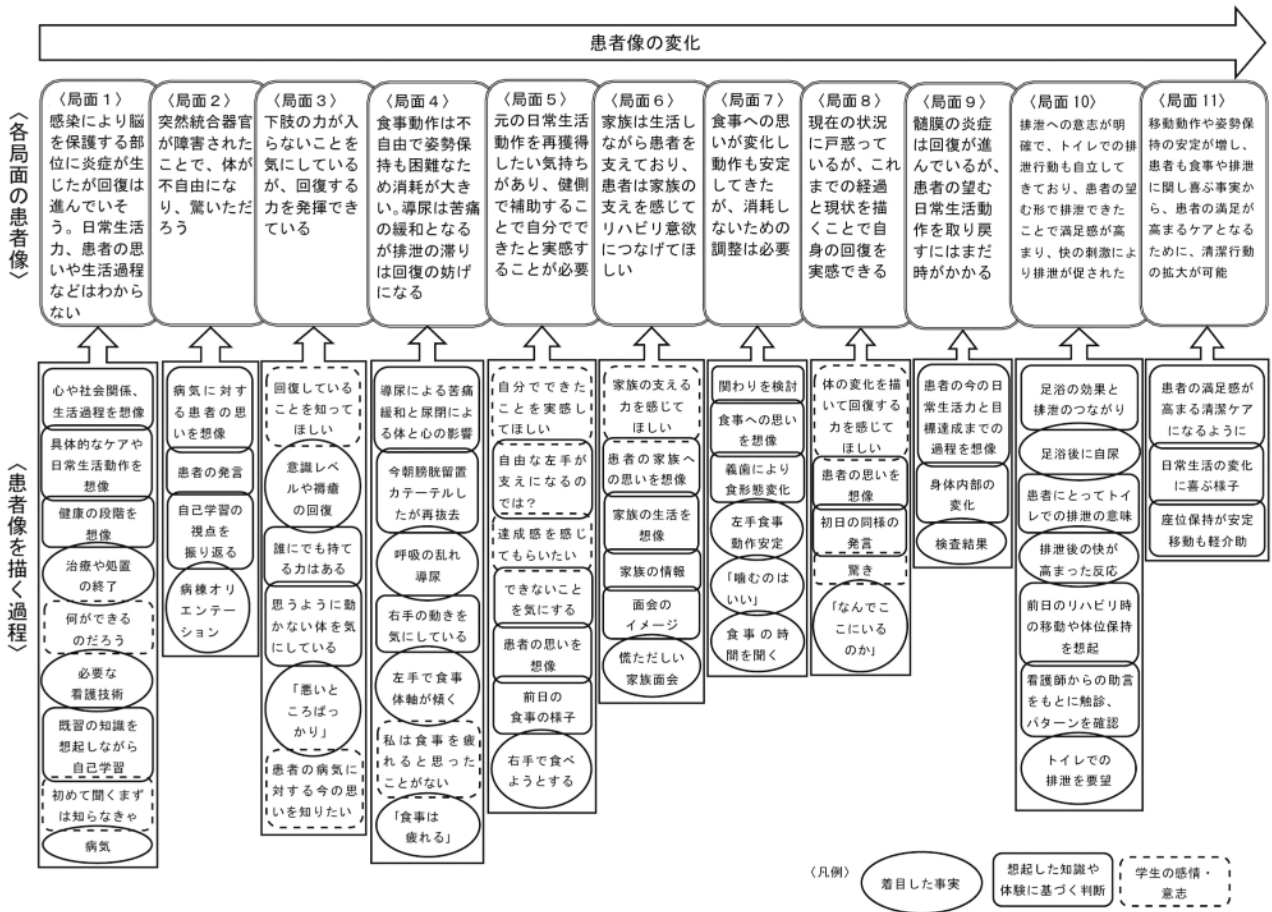


図2 学生Aが患者像を描く過程

さらに、学生Aは患者が「食事は疲れる」と話し、自分は食事が疲れると思ったことがないと思いつながら患者にとって食事は消耗が大きいと描いていた。また、長男の面会時、患者に会えず荷物だけ置いてすぐに帰り、自分が持つ面会のイメージと比較して患者の寂しさを想像しながらも、家族は自分の生活がありながら患者を支えていると考えていた。学生Bは、ベッドの高さを下げると患者が発声した様子とその時の関わりを思い返し患者は怖かったのかもしれないと患者の思いを想像したり、ミトンに自分の手を入れて患者の熱感と不自由さを想像していた。学生Cは、自分が集めた情報とこれまでの自分の関わりを振り返ると、失禁を繰り返すことは患者にとって不快感となるだけでなく、面会が難しい家族にとっての負担であると事実の

つながりが見えるようになっていた。

以上のことから、学生は捉えた事実を、学生が持つイメージや追体験、関わりの客観視をもとに、患者にとっての意味を考えようと取り組んでいたことがわかる。

つまり、学生が患者像を描く過程には、学生は患者像を描けていないと自覚することで患者への関心が高まり、捉えた事実を学生が持つイメージや追体験、関わりの客観視をもとに患者にとっての意味を考えながら患者像を描こうとするという特徴があるといえる。

(2) 患者像が広がる過程について

全ての学生は、事前情報を受け取り実習に入る前に、患者の病気や症状に着目していた。

学生Aは、感染により脳を保護する髄膜に炎症

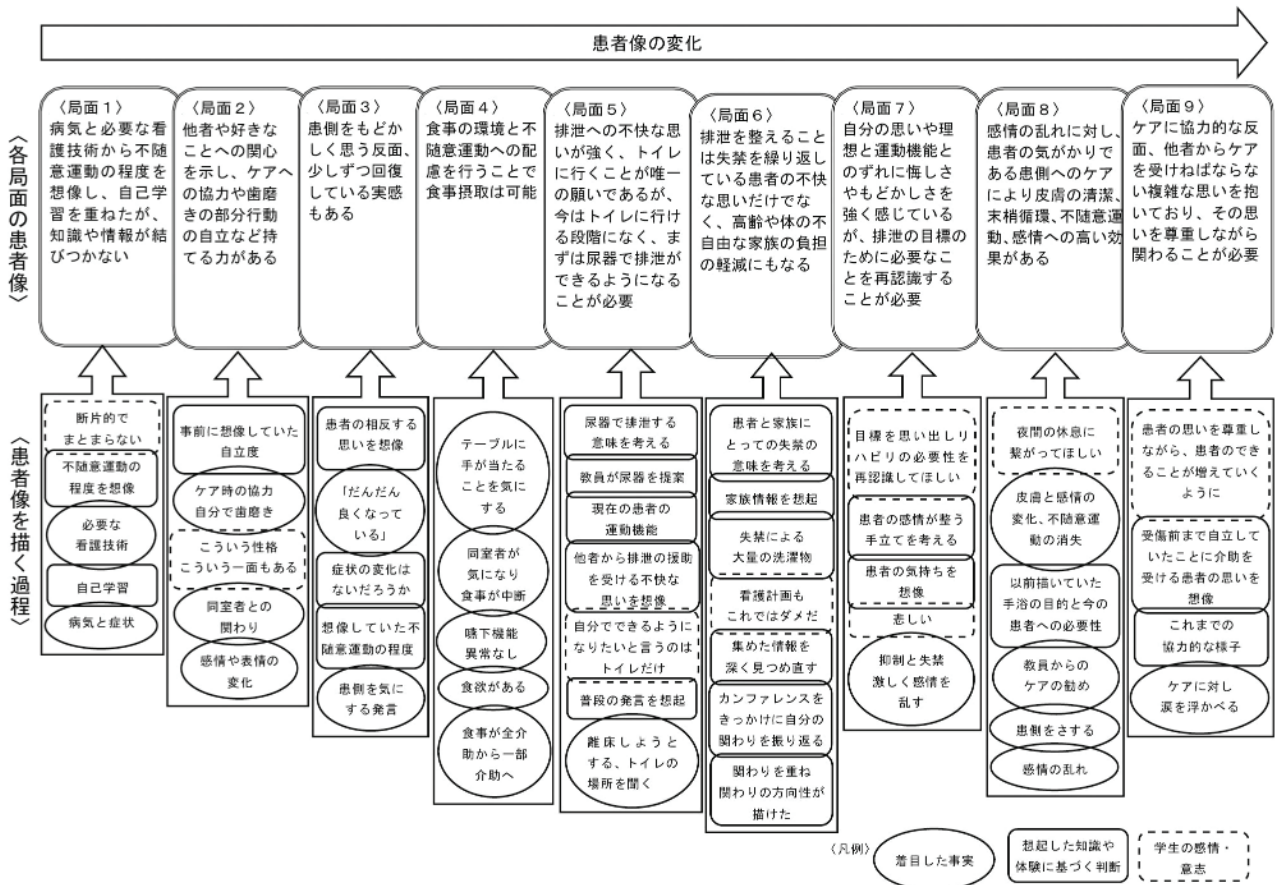


図3 学生Cが患者像を描く過程

が生じたが回復も進んでいるのでは、とからだの変化を描くと、そのような患者の日常生活力が気になり、関わりながら患者は食事や排泄の動作が困難であると捉えていた。また、実習初日に病棟師長から突然障害を負った人が多い病棟と説明を受け、自己学習では患者のからだの状態が気になり、患者の思いを考えていなかったと振り返り、現在の患者の置かれている状況への関心が高まり、患者は突然体が不自由となり驚いただろうと患者の思いへ関心を注いでいた。学生Bは実習前には、患者の病気や薬剤について自己学習を行うが患者の状態を想像できず、直接関わることで患者はコミュニケーションが困難で日常生活のほぼすべてに他者からの介助が必要と描いていた。そして、過去の体験実習を想起することで、患者の思いに

対する関心が高まり、患者の表情の変化やわずかな反応を丁寧に見つめ、患者の思いを想像していた。学生Cは、病気や症状、治療や薬剤について自己学習しながら患者の重症度を想像しようとしたが、まとまった像にはならなかった。関わりを通して、髭剃り後の嬉しそうな表情や同室者を気遣う発言から、こういう一面がある人と患者の個別な反応を描き、患者は声かけにて十分に咀嚼したり口腔ケアで力強く含嗽したり、想像していたより自立度が高いと捉えていた。さらに、患者の発言から患者が患側を気にしていることを感じ取りつつも、症状の変化はないか尋ね、回復を感じていることも描いていた。

また、全ての学生が実習初期の段階で家族の情報収集をし、実際に面会時の家族の様子や患者の

反応から家族の生活や患者との関係性を描いていた。

以上より、学生が患者像を描く過程には、学生はまず、からだの変化に関心を注ぎ、日常生活にどのような変化が生じているか、その事実を捉え、患者の反応からその状況にある患者の思いを描こうと関心を注ぐ。捉えた事実の対象にとっての意味を描こうと取り組むことで、からだところと社会関係のつながりが描け、さらに、その変化のプロセスを捉えようとするという特徴があるといえる。

(3) 患者の持てる力を見出し、患者のよりよい姿が見えることで、今の看護上の問題を見出す過程について

学生Aは、患者の「悪いところばかり」という発言から患者が思うように体が動かないことを気にしていると患者の思いを想像しながらも、患者に何か持てる力はなかったかと意識的に探していた。褥瘡が治癒した事実に着目し、回復する力を発揮できていると持てる力を捉えていた。そして、患者自身が回復する力を実感しながらこれからの回復過程が進んでいくことが必要と描いていた。学生Bは、患者の失禁に気付いた際に、直前に患者が健側で腰あたりのリネンを掴んだことは失禁を訴えていたのではないかと考え、患者は言葉以外の方法で自分の不快感を他者に訴える力があるのではないかと捉えていた。そのような患者の力をどうにか発揮できないかと考え、経口摂取ができれば抑制が解除となり他者に自分の不快感を訴えることができ、それは患者の自律性を高め生活の質の向上に繋がるのではないかと考えていた。学生Cは、患者のケアへの協力や歯磨きの部分行動は持てる力であると捉え、失禁時の患者の様子からトイレに行くことは患者にとって唯一の願いであると気付いていた。患者が失禁に対し激しく感情を乱した様子から、患者の失禁に対する悔しさや不快感を強く感じ取りつつも、患者が自力でトイレに行けるために必要なことを再認識することが必要と捉えていた。さらに、ケアに協力的な

反面、涙を浮かべる様子から、複雑な思いを抱いていると捉え、患者の思いを尊重しつつ患者のできることが増えていくように関わる必要があると描いていた。

以上より、全ての学生が目の前の患者に存在する持てる力を見出そうと取り組んでいたことが確認でき、学生が患者像を描く過程には、学生は目の前の患者に備わっている持てる力を見出そうと取り組むことで患者の願いに気づき、その願いの実現を妨げているものとは考え、解決すべき対立が見え、患者の目標像が描けるという特徴があるといえる。

IV. 考察

分析の結果、学生が基礎看護学実習において患者像を描く過程の特徴が明らかになった。学生が患者像を描く過程の特徴から、看護過程を展開する上でのどのような意味があるのか検討し、看護するための患者像形成につながる実習指導のあり方について考察する。

1. 学生自身が患者像を意識できるために

基礎看護学実習は初めて実際の患者への看護過程を展開する実習である。学内演習での紙面上の患者のように情報が整理されている状況とは異なり、無限の事実の中から、看護するために必要な情報を自ら取捨選択しながら患者像を描いていく。分析結果から、学生Aと学生Bは実習初期から、患者像を描けていない、不明確と自覚して、具体的に何が描けていないのかを明確にし、意識的に患者像を描こうとしていたことが明らかとなった。学生Cは、カルテや患者との関わりから患者の事実を収集し、患者に必要な援助を見出し関わることができていた。しかし、実習中盤にカンファレンスを通して、情報は増えているがまだ患者像が描けていないと自覚し、自ら集めた事実やこれまでの関わりを振り返り患者像を描こうとしていた。

学生はなぜ、初めて1人の患者を受け持つ実習において、意識的に患者像を描こうと取り組めたのだ

ろうか。看護は常に人間が人間を見つめるところから出発するものであり¹¹⁾、自分ではない他者である患者について、看護者の認識に像として描き出すことから看護は始まる。よって、学生が患者像を描けていないと自覚できたのは、基礎看護学実習の段階でも看護をするために患者を描くという目的意識をもってことが推察される。学生は、何が描けていないかを明確にすることで、何を見つめたらよいかという視点も定まり、意識的に患者を描くことに繋がったと考える。

学生が看護するための患者像を描けるには、学生自身が患者像を描けているか否かを自覚できなければならぬ。基礎看護学実習において、学生が自らのように患者像を描いているかと問い直すことは、一般的には困難であると考えられるため、指導者は学生が自身の患者像を意識できるように関わる必要がある。そのためにはまず、指導者は学生が患者のどのような事実を捉え、どのような患者像を描いているのかと関心を寄せることが必要であると考える。さらに、指導者は学生がこれまで学んできた患者の見つめ方をどのように活用しながら患者像を描こうとしているのか、と学生の患者像の描き方にも関心を寄せることが必要である。

以上より指導者は、学生の表現をもとに、学生が患者のどのような事実に着目し、患者の立場から意味を考えどのような患者像を描こうとしているかを読みとり、学生自身が自己の患者像を意識できるように関わる必要があると言えよう。

2. 学生が患者の事実のつながりと意味が考えられるために

分析結果から、学生は患者像を描こうとするときに、患者のからだを描くためにただ病気や治療などの事実を得ようとはしておらず、病気によって患者に何が起こっているのかとその意味を考えることで、患者のこころや生活へと関心が広がっていた。人間は体だけでなく心があり、それは社会関係のなかでつくられ、この体と心と社会関係は有機的なつながりをもって、その時々“状況”として存在している

¹²⁾。学生は、からだとこころと社会関係の事実から全人的に患者を描こうとしていたことが浮き彫りとなった。

学生は患者の事実を捉えるだけでなく、患者にとってどのような意味があるのかと事実のつながりと意味を考えることで、全人的に患者像を描く事ができたと考える。学生は、これまで患者の見つめ方のみならず、看護するためには、患者の事実を見つめ、患者にとっての意味を考えようと努力することの大切さを学んできている。これは、生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえるという看護の目的に照らして患者の事実を見つめ、事実のつながりと意味を考えることで看護に必要な事実が情報化され、必要な看護を見出そうとしていたといえないだろうか。だからこそ、学生が捉えた事実を学生自身が患者にとっての意味を描こうとできるかが重要となると考える。

以上より指導者は、学生はからだの状態を知識として捉えようとしているのか、その人のからだの中に起こっている変化を描こうとしているのか見定め、生活にどのような変化が生じているのかその事実に着目できるよう関わり、患者のからだとこころと社会関係のつながりとその変化のプロセスを描けるように、看護の目的に照らして対象の立場から事実を意味づけできるように支援することが必要である。

3. 学生が患者の持てる力に着目できるために

学生Aは患者に何か持てる力はなかったかと意識的に問いかけ、学生B・学生Cは患者との関わりの中から患者の持てる力、患者自身で力を発揮しようとしている部分に着目できていた。患者を消耗させているものは目に留まりやすく、患者の持てる力は意識的に見ようとしなければ見えてこない。患者の持てる力が見えてきたことで、学生Aと学生Bは患者のよりよい状態が描け、学生Cは患者の複雑な思いをより強く感じ、患者への必要な看護を見出していた。

このことから、学生は患者の持てる力が見えてくることで、看護上の問題がより浮き彫りとなり、看護過程展開の質が上がっていくと考える。学生は患

者との関わりを積み重ねていく中で患者の持てる力を感じ取ることで患者の持てる力が発揮できるように看護として支えたいという看護観も深まると考える。

以上より指導者は、学生が患者と関わる中で、すべての人間に備わっている持てる力に関心を注げるように支援することが重要であると考えます。

V. 結論

本研究は、基礎看護学実習において看護学生が患者像を描く過程を分析することで、学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにし、実習指導上の示唆を得た。

〈学生が患者像を描く過程の特徴〉

1. 学生は患者像を描けていないと自覚することで患者への関心が高まり、捉えた事実を学生が持つイメージや追体験、関わりの客観視をもとに患者にとっての意味を考えながら患者像を描こうとする。
2. 学生はまず、からだの変化に関心を注ぎ、日常生活にどのような変化が生じているか、その事実を捉え、患者の反応からその状況にある患者の思いを描こうと関心を注ぐ。捉えた事実の対象にとっての意味を描こうと取り組むことで、からだところと社会関係のつながりが描け、さらに、その変化のプロセスを捉えようとする。
3. 学生は目の前の患者に備わっている持てる力を見出そうと取り組むことで患者の願いに気づき、その願いの実現を妨げているものとは考え、解決すべき対立が見え、患者の目標像が描ける。

以上より、看護するための患者像形成につながる実習指導上の示唆を得た。

〈実習指導上の示唆〉

1. 学生の表現をもとに、学生が患者のどのような事実に着目し、患者の立場から意味を考えどのような患者像を描こうとしているかを読みとり、学生自身が自己の患者像を意識できるように関わる。
2. 学生はからだの状態を知識として捉えようとし

ているのか、その人のからだの中に起こっている変化を描こうとしているのか見定め、生活にどのような変化が生じているのかその事実に着目できるよう関わり、患者のからだところと社会関係のつながりとその変化のプロセスを描けるように、看護の目的に照らして対象の立場から事実を意味づけできるように支援する。

3. 学生が患者と関わる中で、すべての人間に備わっている持てる力に関心を注げるように支援する。

VI. 本研究の意義と限界および今後の課題

本研究の意義は、基礎看護学実習で学生が患者像を描く過程という、目には見えない学生の認識活動を、学生の記録のみならずインタビューを実施して、学生の認識活動をより浮き彫りにしながら、その過程の特徴を明らかにしたことである。また、基礎看護学実習に焦点を当てており、学生にとって特に困難な学習と考えられる実習での、学生の患者像を描く過程を推察する助けになると考える。

今後は、看護するための患者像形成につながる実習指導上の示唆を活用することで、基礎看護学実習における学生の患者像の描き方が深まり、看護実践の質向上につながるのかを検証していくことが課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、参加協力くださった学生の皆様、研究するきっかけを与えてくださった学生の皆様に心より感謝申し上げます。多くの学びをくださいました患者様、研究へのご理解を頂きました実習施設の方々に、心より感謝申し上げます。

本論文は、宮崎県立看護大学大学院看護学研究科における修士論文を一部加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 笠井恭子, 高鳥真理子 (1999): 基礎看護実習における学生の戸惑いの実態, 福井県立大学看護短期大学部論集, 9, 75-82.
- 2) 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 他 (2015): 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—, 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134.
- 3) 井村香積, 高田直子, 新井龍, 他 (2009): 学生が体験した患者との関わりにおける困難と困難からの学び取り, 滋賀医科大学看護ジャーナル, 7 (1), 27-30.
- 4) 目時まゆみ, 佐藤和子(2008): 基礎看護学実習Ⅱにおける学生の困難感, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, 1-6.
- 5) 三井美恵子 (2010): 基礎看護学実習における学生の患者理解, 東京厚生年金看護専門学校紀要, 12 (1), 58-67.
- 6) 下川原久子 (2017): 基礎看護実習Ⅱにおける学生の「患者理解」—初めての看護過程展開より学びの分析—, 八戸学院短期大学研究紀要, 44, 29-39.
- 7) 掛川静代, 小林廣美, 森崎由佳, 他 (2015): 看護大学生の基礎看護学実習Ⅱでの学び—患者のとらえ方について—, 兵庫大学論集, 20, 53-58.
- 8) 田村房子(2000): 臨地実習における看護学生の看護者としての認識への発展過程の構造, 千葉看護学会会誌, 6巻-2, 47-53.
- 9) 薄井坦子(2008): 科学的看護論, 第3版, 日本看護協会出版会.
- 10) 前掲載9), 107.
- 11) 薄井坦子 (2012): 改訂版 看護学原論講義, 20, 現代社.
- 12) 眞田清子, 清水知寿子, 板谷和子, 他(2006): 患者理解への看護の視点—科学的看護論を使う—, 19, 日本看護協会出版会.

The characteristics of nursing students' process of envisioning the patient in a fundamental clinical practicum

Kei Ioki, Tomoko Tsuda, Hitomi Yamagishi

【Abstract】

This study attempted to clarify characteristics of how nursing students envisioned patients in fundamental clinical practice and obtain insight for use therein. Subjects were three nursing university students participating in a second-year clinical practicum. The research method utilized students' clinical practice records, authors' clinical practice notes, and interviews conducted with the students to reconstruct their nursing processes focusing on opportunities to change their envisioning of the patient. Characteristics of students' recognition in, and between, each situation, as well as their processes of envisioning the patient were extracted. Through an examination of the similarities and differences in each student's envisioning of the patient, the following three characteristics were clarified.

- ① Students' interest in the patient increased through the realization that they had not envisioned the patient fully, which prompted their attempted envisioning of the patient while considering this meaning for the patient, their own experience, and the objective view of this relationship.
- ② Students first regarded the changes both physical and those occurring in the patient's daily life, and tried envisioning the patient's feelings from their reactions to the situation. Through envisioning the meaning of these realities for the patient, students were able to realize the connection between body, mind, and social relationships and then attempted to grasp these processes of change.
- ③ By trying to discover their patient's vital power, students became aware of the patient's desires, considered hindrances to those desires, acknowledged the conflict to address, and successfully realized the patient's objective.

Through inquiry of student experience, nursing educators were able to grasp the facts on which students focused in their envisioning of the patient in fundamental clinical practice, and the necessity for educators to enable students to envision the patient and consider them from the patient's standpoint, while keeping prior learning and the patient's vital power in mind.

【Key words】 Fundamental clinical practicum, Nursing student, Patient image, Nursing process